

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO.52

2005年5月

Special to the Newsletter

アメリカ研究をめぐって—さまざまな悩み—

島田太郎

アメリカ文学の研究を始めた頃の悩みは、日本人であり、英語を母国語にしている人間よりもはるかにテキストを読む能力が劣る自分が、いったいどうしたら学界に貢献できるのだろうかと言う疑問につきまといわれていたことである。その悩みは70歳近くなった今でも完全に消えてはいない。

しかしフルブライト研究生としてイエール大学に留学をした時に気がついたことがいくつかある。例えば、まったく当たり前のことだが、アメリカ人の学生の大部分にとっては英語で書かれた文献が目の前に—他の言語で書かれたものを見にくくする目隠しのような効果をもって—立ちはだかっているということ。フェニモア・クーパーの作品を議論しているときに、彼らはバルザックのクーパー論を読んでいなかったし（60年代にはまだ英訳は出ていなかったと記憶している）、バシュラールもすでに日本では紹介されていたのに、英文科・アメリカ科の大学院生で知っている者は一人もいなかった。比較文学の専攻にはもちろんいたが。我が国ではどちらも異国の文学だという点で、距離がさほど変わらない英語圏以外の国の文学をも見すえて—例えばカイザーがグロテスクという視点からポーを論じたように—広やかな視野からアメリカ文学を論じるということの可能性をその時に感じたのだった。

もちろん英語すらろくに読めないのに、まして他の言語で書かれたものなど

という批判もあろうが、翻訳大国の日本のありがたさ、バシュラールをはじめカイザー、ホッケ、ジョルジュ・プーレとかぞえれば、翻訳で読める優れた研究書の数が多い。こうした研究を援用すれば新しい展望が開けそうだという気がするのだ。もちろんその後英訳が出版されたものもあるけれども。それにことはかならずしも英語以外で書かれたものに限らないのだ。英語圏のものでさえも、アメリカ人にはやはり自国文学と等距離に見ることはむずかしそうに見える。例えば形而上詩人やトマス・ブラウンとメルヴィルを等距離においた論文を読んだことがない。バズル・ウィリーのような思想史をうまくとりこんだものも数は多くないように思う。いや、自分がほとんど実行できなかったことを口幅ったく言うのは気が引けるのだが。

もう一つ気がついたのは、彼らがほとんど辞書を引かないと言うこと。イェールやハーヴァードの図書館の参考室にはせいぜいウェブスターの第二版が置いてあるだけであり（第三版が出ているのにもかかわらず）、OEDなどなかった。我々が漱石を読むときに一々辞典に当たらないのとおそらく同じように、彼らもメルヴィルを読むときにふつうOEDをひかない。つまりある文章に用いられている言葉が古語か、あるいは作者の造語かなどと言うことは気にとめない。その結果は文体などに対する感覚は、もちろん直感的には我々よりも優れているにせよ、ある面では欠落していると思ったことが時々あった。

アメリカ文学の研究においては、こうした面で多少は貢献できるかも知れないという思いを頼りに仕事を続けてきた。ところが40代になると、アメリカ研究の講座を担当することになった。もちろん方法論は手探りでもあるていど分かった。例えばフィッツジェラルドを授業で教えるときでも、英文科では彼の作品群に焦点をあてるが、アメリカ科ではジャズ・エイジの特質解明に力を注ぐ。アーサー・ミラーの『るつぼ』を読むときにもセイラムの魔女狩りとマッカーシズムの関係に重点をおく。だがそれだけのことならば、アメリカの研究者たちがやっていることの二番煎じではないか。それもセイラムの事件については、一次資料を駆使できる彼らにかなうはずもない。

それにそもそもアメリカ研究が始まった事情を考えても、アメリカと我が国では違いうだろう。アメリカでアメリカ研究が発足したのは、大体1950年前後であろう。1951年に American Studies Association が正式に発足し、その前々年に創刊されていた *American Quarterly* をその機関誌として傘下におさめる。ヘンリ・

ナッシュ・スミスの『ヴァージン・ランド』（1950）、R. W. ルイスの『アメリカのアダム』（1955）といった代表的な研究書が次々に出版される。それは第二次世界大戦という危機にさいして、サラダ・ボールの状態のなかで有機体国家としての自覚を促された結果、E Pluribus Unum というモットーの証明に迫られたからに他ならない。従って彼らにとっては、アメリカ研究は自らのアイデンティティを賭けたものであったはずだ。ところが我々にとっては、こうした内面の要請は比較的弱い。まずアメリカの庇護のもとで、次にはよきパートナーシップを維持するために、よりよくアメリカを理解したいという要請から始まったものである。だから彼らとは違った視点をもちうるし、またもつ方が戦略的にも有利であろう。

例えばいまだに大多数のアメリカ人が原爆投下を正当化しているが、もし日本が白色人種の国、キリスト教国家であったら、原爆ははたして落とされたであろうか。あの戦争でアメリカ兵の戦死者は約32万人、原爆投下から5年以内の非戦闘員の推定死亡者はおよそ40万人という数字をどう考えたらいいのか。いや、その後朝鮮戦争、ヴェトナム戦争、そして今度の対イラクの戦争、どれにも共通する点がある。多国籍民族を構成員とするだけに、キリスト教を求心力の中心にすえ、十字軍の役割をくり返しているのではないだろうか。これだけを梃子にしてアメリカ論を書いたら、それは一方的だという非難を免れないかもしれないけれども。

こうしたアメリカを外から見たアメリカ研究の危険性は、やはり自分の立場を正当化しようとする無意識のうちになりがちだということだろう。その危険を避けるためには、他の視座からの研究との比較検討が必要になるはずだ。

こんなことを考え、例えば夭折したトラクテンバーグの仕事などを漠然と思い浮かべていたときに、アメリカス学会から原稿を書いてみないかというお話しを頂戴した。自分の無知をさらけ出すようでお恥ずかしいが、アメリカス学会の存在をそれまで知らなかった。なるほどこうした視点で研究の相対化をはかることもできるのか。確かに中南米の研究を踏まえて合衆国の研究をすることも、その逆も可能だろう。アメリカス学会が新しい研究の地平をきりひらかれることを確信し、70の手習いを始めるべきかどうか、新しい悩みがふえた。

(昭和女子大学教授)

文学の中のアメリカ生活誌 (43)

新井正一郎

Master and Journeyman (親方と職人) 中世のヨーロッパにおいて始まったguild「ギルド」(同業組合を意味する古代スカンジナビア語gildiから) というのは、普通自分の仕事場を持つmaster craftman「親方職人」とその家に同居するjourneyman「(年季をすませた) 職人」(英語として初めて使われたのは1463年) とapprentice「徒弟」(学ぶという意味のラテン語apprendereが古フランス語を経て1362年に英語に入った) の集団を指す。

17世紀にイギリスから北アメリカに最初にやってきた入植者の大半は農民だったが、医者、牧師の他に織工、靴屋、桶屋など職人といった職業の人々もいた。職人のなかにはイギリスで特殊な技術を身につけた者もいたが、粗野そのものといえる状態だった当時のアメリカの入植地が彼等に求めたものは、なんでも屋としての技術だった---例えば車大工は農業をやりながら、家具、はさみ、自在鉤、戸棚鍵、靴など、集落の農民が求めているものはなんでも手掛けた。この事実は開拓民(自営農民)の家庭が完全自給の状態でなかったことを示していよう。1689年頃になってやっとhomemade「自家製の」という言葉ができたことから、一般に植民地時代の自営農民は一切を自らの手で作っていたと思われがちだが、実のところ彼等は足りない物があると、近隣の職人の小さなshop「店」(1297年の言葉。物の売られる場所を指す古英語sceopaからきた単語)に行き、そこで作られ、売られていた物と「物々交換」していた。かくして店を意味するshopは、仕事場という新しい意味を付け加えるようになった。イギリスでは16世紀以降、factory(1618年の言葉)、manufactory(1692年の言葉)など、物を作る場所を意味する語彙が出来ていた。そしてそのような場所で働いている人々は、workmanとかworking man(ともに1638年頃という言葉)と呼ばれた。working woman「女子工員」という言葉が使われるようになるのは1889年になってからだ。

ところで、植民地時代のアメリカの職人は、数名の見習い少年たちと親方の家に家族の一員として住み込んでいたが、イギリスの場合と違い、アメリカの職人世界の仕組みには、ギルドの拘束が強くはたらかなかった。7年に及ぶ辛い徒弟期間を終え、独立した職人として一生懸命に働いても、親方として開業できるだけの資金が得られなかったこと、また独立革命戦争当時、仕事場の厳しい修業を嫌って多くの若者が、the Sons of Liberty「自由の息子」という名の反英グループに入り、植民地軍に加担したので、親方にとって徒弟集めが難しくなったことなど、さまざまな理由が考えられる。事態打開の一環として、徒弟期間が従来の7年から4年に短縮された(それでも若きBenjamin Franklinのように、修業途中で親方のもとから逃げだした少年はかなりいた)が、今度は徒弟の技能低下が大きな社会問題になった。熟練職人たちもこの状態に目をつぶっていたわけでない。彼等のなかには、技術指導を意図した団体をつくり、あまり仕事意識を持っていない職人をかかえている親方に強く抗議した者もいた。ニューヨークの印刷職人たちが1794年につくった「ニューヨーク印刷協会」はその先端的現れである。

こうしたすでにひびのはいていた職人養成の仕組みを一気に消滅させたもの、それがイギリスからアメリカに飛び火した産業革命であった。多くの業種でfactory system「工場制」(1830年代の言葉)、すなわち機械を用いて作業をさせる生産組織が普及したからだ。Whitmanの作品からjourneymanの用例をあげておく。Who learns my lesson complete? / Boss, journeymen, apprentice,

churchman and atheist.

Union and Strike (組合とストライキ) イギリスの重商主義規制は一切の機械の輸出と熟練職人の移住を含んでいた。が、1789年法を犯してアメリカに渡ってきたダービーシャー州からの移民で機械工であったSamuel Slaterは、ニューヨークで出会ったロードアイランドの商人から建設資金を出してもらい確約をとりつけると、自らの抜群の記憶力を頼りにロードアイランド州ボウタケットに複雑な紡績機を復元し、アメリカで最初の水力機械工場を立ち上げた。当初、彼は労働力もイギリスのやり方に倣い、徒弟でなく、貧しい家の児童に機械を操作させ、綿糸を製造させた。だが、人手が集まらなかったため、彼は農家の家長と契約し、全家族を雇うようになっていった。

アメリカの産業革命のコアの時期と呼ばれる1820~40年間に、ニューイングランド地方に建設された大規模な機械制工場では、全家族方式の雇用ではなく、ニューイングランド各地の貧しい家から募集した新米の働き手(若者、女性、子供)を雇用するという異なった形の方式が導入された。当初彼等は工場近くの寄宿舎に住み、そこから職場に出掛けていったが、後述するストライキに参加した者の殆どが寄宿舎の連中だったので、まもなく寄宿舎の建設を禁止されてしまった。その結果1840年までには都会はかつてないほど間借り人で占められるようになった。職住一致(近接)という伝統的な形態の崩壊である。ところで、動力付きの機械を導入したfactory owner「工場主」(1840年代の言葉)は、不熟練工をいくつかのグループごとに分け、彼等を監督するforeman「職長」(イギリスでは1574年から使われた)を雇った。しかもグループはさらに大きな仕事の一部を担当するだけだったので、次第に彼等は完成品から切り離されてしまった。かつて輝かしい地位と比較的高い賃金を得ていた熟練職人も単なる労働力となり、工場の利益に影響すればもっと安い労働力と取り替えられた。こうして従来からの徒弟制=職人にとって代わって、labor「労働者階級」(1830年の言葉)と呼ばれた新しい型の働き手が増え、アメリカの市場には疲れを知らない機械で作られた安い大量のfactory goods「工業製品」(1793年の言葉)が溢れていった。

18世紀後半、印刷工、大工、靴屋などをはじめとした熟練職人を中心にして技術向上を目的としたいくつかの地方的な労働団体が結成されたが、アメリカでlabor movement「労働運動」(1870年代になって広まった言葉)が姿を見せるのは、低賃金の長時間労働を強いられていた工場の労働者が、より良い労働条件を求めてunion「組合」(1833年の言葉)を結成した1830年代になってからだ。しかし、当時はまだ労働者の団結行動は違法とされていたので、組合加入者は告訴された。初期の労働組織は英語にいくつかの抗議用語をもたらした。そのひとつにstrike「ストライキ」がある。この言葉は1768年、不満を抱いていた船員たちが帆をおろして(striking sails)働くことを拒否したことがもとになっている。もともと動詞だったこの語が、アメリカで初めて名詞として使われようになるのは1809年である(それまではtounoutと呼ばれた)。職種を越えた全国的な労働組合が広がり始めるのは、1842年にマサチューセッツ州最高裁がモンウェルス対ハント事件に労働組合とストライキは合法だ、という決定をだしてから暫く経った1850年代から1860年代にかけてであった。しかし1873年の恐慌で、全国組織数は10団体程度まで落ち込んだ。次はJohn Dos Passosの*The 42nd Parallel* (1930)中の一文である。G.H. Barrow had had an interview with the president. He was a member of a committee endeavoring to mediate the railroads and the Brotherhoods that were threatening a *strike*.

(天理大学国際文化学部教授)

言語学的距離

平井明代

今からもう20年近く前のことである。当時アメリカの大学で、修士課程の一環として教育実習 (practicum) の単位を取るため、大学附属のESLのクラスで英語を教えることになった。それ以前にも英語を教えたことはあるが、状況がまったく違っていた。ESLのクラスは、様々な国から来た人たちで構成されており、当然共通言語は英語であった。アジアからの日本人、韓国人、中国人、スペイン語を母語とするメキシコ、グアテマラ、ホンジュラスからのラテンアメリカ系の学生、そしてフランス、ドイツ、スウェーデン (ノルウェーだったかもしれない) から来たヨーロッパ諸国の学生の計十数名のクラスであった。

数ヶ月間に渡る授業を担当して脅威を覚えた。それは、スピーキングの習得スピードが明らかに違っていたことだ。母語をスペイン語とする学生は、一般的にいつも陽気で積極的に発言し、ヨーロッパから来た学生も授業だけでなく授業外でもよく英語で話していた。特にスウェーデンから来た学生などは発音もきれいで文法ミスも少なく、週を追うごとにスピーキング力の伸びが目覚しかった。授業最終日などは、「私なんかよりずっと英語が上手じゃない」と言いたくなる程で、自分が教えているのがはずかしかった。それに比べると、アジア系の学生、中でも日本人は授業中の発言がなく、こちらから指名しない限り、彼らが英語を話すのを聞くことはなかった。がんばれ日本人と心の中で思いながら授業を進行していたが、最後までその内気な態度は変わらなかった。そしてスピーキングに関する限り伸びがあまり顕著ではなかったように思われる。

私にとってこれは努力の差ではなく、母語による影響ではと感じた初めての経験であった。パーティーでヨーロッパから来た学生に聞いてみると、英語は彼らにとって全然難しい言語ではなく、語順、語彙がかなりに似通っており、英語の単語を代わりに入れて話をするような感じでそれほど抵抗はないと語っていた。スペイン語を母語にする学生たちも、英語と類似している単語が多く、日本人学生のようにわからない英単語に辞書を片手に必死で取り組んでいる学習とは異なっていた。

この母語と習得言語間の距離については、移民の多い米国やカナダ、オーストラリアを中心に研究されており、language distance または linguistic distance と呼ばれ、“the relative degree of similarity between two languages” (Davies & Elder, 1997) と定義されている。もう少し詳しい説明が *The Cambridge Encyclopedia of Language* に次のように載せられている。

“The structural closeness of languages to each other has often been thought to be an important factor in FLL (foreign language learning). If the L2 [the foreign language] is structurally similar to the L1 [the original language], it is claimed, learning should be easier than in cases where the L2 is very different. However, it is not possible to correlate linguistic difference and learning difficulty in any straightforward way . . .” (Crystal, 1987, p. 371)

上記の説明にもあるように、言語は大変複雑で、語彙、文法、文字、統語、音韻、その他様々の側面があり、それぞれの要因でその言語学的距離は変わってくる。よって正確な距離を割り出し、一直線上に難しい言語から易しい言語に並べるとはかなり難しい。例えば英語とフランス語は、英語と日本語よりは近いと感覚的にわかるが、果たしてどれくらい近いのか、また、英語とスペイン語間と日本語と韓国語でどちらが近いのか判断するのが難しい。さらに、言語距離を測定するために比較実験を行うにあたって、被験者の年齢、第二言語経験、環境、モチベーションなどの要因がかかわっており、一概にその結果を妥当とすることもできない。言語族などの起源に基づく分類も大いに参考になり得るが上記の理由で言語学的距離を推定するのが難しい。

米商務省の言語習得機関であるFSI (Foreign Service Institute) は、同一の言語母語話者がさまざまな言語を習得するにあたって実際にどの程度習得に困難を感じるか、どれくらいの期間でどの程度習得することができるのかという観点から言語距離を調査した。アメリカ人英語母語話者の外国語学習時間を一定にし、24週間後に言語習得テストを行った。その得点をそれぞれの外国語ごとに平均し言語指数 (language score) を算出した(表1)。最高3点、最低1点で、得点が高いほど英語母語話者にとって習得が易しい言語であり、英語からの距離が近いことを意味する。これで見ると、ヨーロッパ言語は比較的易しく、ノルウェー語やスウェーデン語などは3.00になっている。一方、アジア諸国の言語は比較的難易度が高くなっており、中でも日本語と韓国語が最も習得が難しく、続いて中国で話されているCantonese (1.25)とMandarin (1.5), そしてArabic (1.5)の順になっている。

表1. 英語母語話者の外国語習得の難易度 (43言語中一部抜粋)

取得言語	言語指数	習得言語	言語指数
Afrikaans	3.00	Hebrew	2.00
Norwegian	3.00	Mongolian	2.00
Rumanian	3.00	Tagalog	2.00
Swedish	3.00	Thai	2.00
Dutch	2.75	Greek	1.75
Malay	2.75	Hindi	1.75
French	2.50	Arabic	1.50
German	2.25	Mandarin	1.50
Spanish	2.25	Cantonese	1.25
Russian	2.25	Japanese	1.00
Indonesian	2.00	Korean	1.00

(Hart-Gonzalez & Lindemann, 1993)

この言語指数は、あくまでも英語母語話者を基準にして算出したもので、他言語から英語を習得する場合の得点ではない。そこで、この指数に基づいて3つのグループに分け、アメリカやカナダへ移民した外国生まれの男性の英語（あるいはフランス語）習得状況を調査した結果が表2にある。他の要素を同じにし、カナダに5年以上住んでいる移民の母語と英語の言語学的距離が遠いほど、英語あるいはフランス語で会話ができる人が少なくなっている。最も離れた指数1.0のグループ（日本人や韓国人）の4分の1が十分に英語かフランス語を駆使できないでいる。それとは対照的に、最も言語距離が近いノルウェー、スウェーデンなど（指数3.0）からの移民のうち、英語を十分話せない移民は4.6%しかおらず、ほとんどは流暢に話ができるようになっている。15年以上たった場合を見ても、スピーキング力の違いは顕著で、言語距離の遠い移民の10%が英語かフランス語を十分話せない状態である。

表2. 言語指数およびカナダ滞在期間による習得言語能力（英語圏外出身の男性）

言語指標	カナダに5年以上滞在			カナダに15年以上滞在		
	E1	E2	E3	E1	E2	E3
1.0	24.54	73.88	1.58	10.05	85.35	4.60
2.0	8.00	73.75	18.25	2.32	60.18	37.51
3.0	4.57	61.18	34.24	1.09	41.05	57.86

E1=英語あるいはフランス語で会話をする事ができない。

E2=英語あるいはフランス語で会話をする事ができるが、家庭では別の言語を話す。

E3=英語あるいはフランス語で会話をする事ができ、家庭でもそのどちらかの言語を話す。(Chriswick & Miller, 2001 in Chriswick, 2004).

言語を実際に言語学的観点から分析して、言語距離を出した研究にRutherford (1983)がある(表3)。RutherfordはSVO語順、主語卓越型言語、語用論的語順であるかという3つの観点から、その言語が英語と共通していれば1ポイントを加えた。その結果、最も英

表3. Rutherfordの3つの言語学的観点から見た分類

	SVO ¹	Subj-prom ²	Gram w-order ³	計
英語	○	○	○	3
スペイン語	○	○	×	2
アラビア語	×	○	×	1
中国語(マンダリン)	○	×	×	1
日本語/韓国語	×	×	×	0

1. 主語-動詞-目的語順; 2. 話題卓越型言語vs. 主語卓越型言語; 3. 語用論的語順 vs. 文法的語順 (Rutherford, 1983, p. 367)

語と似ているのが同族語であるスペイン語、次にアラビア語と中国語であった。しかし、日本語と韓国語においては共通点が見られなかった。これから見ても、英語習得において、日本人と韓国人は、ゼロからの学習になることがわかる。

以上のように言語距離は測定しにくいものの、明らかに存在し言語習得に影響を及ぼしている。また、言葉は文化と切り離すことができないとすると、文化的相違（距離）も少なからず英語母語話者との会話に影響を及ぼしていると考えられる。諺に「沈黙は金なり」とあるように、日本人はあまりべらべらとしゃべらないのを奥ゆかしいとしてきた。授業においても、話すことに焦点をおいたディベートやスピーチの訓練は、母語でさえまだ少ない。そんな環境で育った日本人が、言語学的距離の影響が現れやすいディスカッションに、英語ネイティブスピーカーに混じって参加すると気後れがしたり、国際会議での質疑応答に四苦八苦するのも無理はないかもしれない。

では、その言語学的距離が第二言語習得の最も大きな要因かと言うと、必ずしもそうではない。言語習得初期および習得レベルの低い話者にその影響が現れやすいが、習得レベルが上がればその影響は少なくなる (Rutherford, 1983)。また、日本人や韓国人の方がヨーロッパ言語を話す移民より英語の得点が高く、社会経済的条件などの環境が言語学的距離よりも大きな要因になっている (Davies and Elder, 1997) という報告もある。このように、努力をすればあるいは別のプラス要因がそろえば、日本人も言語的に有利な国民と同等レベルに達することができる。事実、スピーキングでは劣る場合でも、読み書きレベルでは引けを取らない日本人も多い。今後は弱点部分を補強するような第二言語訓練はもちろんのこと、母語による話す訓練も必要ではないだろうか。

引用文献

- Chiswick, B. (2004). "Linguistic distance: A quantitative measure of the distance between English and other languages." *IZA Discussion Paper No. 1246*.
- Crystal, D. (1987). *The Cambridge Encyclopedia of Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Elder, C. & Davies, A. (1998). "Performance on ESL examinations: Is there a language distance effect?" *Language and Education* 12 (1), 147-149.
- Hart-Gonzalez, L. & Lindemann, S. (1993). "Expected achievement in speaking proficiency, 1993." School of Language Studies, Foreign Services Institute, Department of State, mimeo.
- Rutherford, W. E. (1983). "Language typology and language transfer." In S. Gass & L. Selinker (Eds.) *Language Transfer in Language Learning*. Rowley: Newbury House.

(筑波大学助教授)

3 学科の最優秀論文執筆者に 「酒本真理子賞」を授与

天理大学アメリカス学会では、毎年国際文化学部の英米、イスパニア、ブラジルの各学科の最優秀卒業論文執筆者に対して「酒本真理子賞」を授与している。

昨年度（2004年度）の「酒本真理子賞」授賞式は、去る3月22日卒業式式典直後に開かれ、上記3学科の各学科教員・卒業生が参列した学科別の集会席上、以下の受賞者3人にそれぞれ賞状と図書券2万円分の副賞が手渡された。

この「酒本真理子賞」は、1989年度に英米学科を卒業し、1年後に志し半ばにして白血病で亡くなった酒本真理子さんに因んで贈呈されるようになった。彼女の父親、酒本昌彦氏からアメリカス学会への寄付の一部をその財源としている。

英米学科：上村浩和

“A Study of Civil Religion in the United States: The Role of Presidents’ Inaugural Addresses in Civil Religious Unification of Americans” [英語論文]

（「アメリカ合衆国の市民宗教に関する一考察—アメリカ大統領の就任演説が国民の市民宗教的統合の上に果たす役割—」）

イスパニア学科：菱川智恵

「カリブ海地域における黒人スペイン語の言語的特徴」

ブラジル学科：菊池奈巳

「日本におけるブラジルの越境ナショナリズム—ブラジル発祥のカポエイラから見—」

編集後記

◇天理大学アメリカス学会では、来る11月の学会創立10周年を記念して、学会出版の第3弾として『アメリカス研究』第

10号記念号を今年12月に単行本の形式で刊行する予定である。記念号の特集は、「アメリカス世界の中の帝国」で、すでに会員に配付されている論文応募要項の通り5月末に募集を閉め切り、掲載論文を選考する。

今回の記念号の出版は、2000年3月に発刊された『アメリカからアメリカスへ—欧米という発想を超えて—』、2003年12月に発刊された『アメリカス学の現在』に次いでアメリカス学会編の啓蒙書としては、第3弾にあたる。

◇天理大学アメリカス学会の新会計年度2005年は、昨年12月の年次大会の折にスタートしました。2005年度の年会費（一般会員：5,000円、賛助会員：1口30,000円）を未納の会員の皆様は、至急、郵便振込取扱票にて指定口座（下記参照）宛にお振り込みくださいますよう、宜しくお願い致します。（TK）

当学会の年会費は、一般会員5,000円です（入会金はありません）。納入は、郵便局で下記の口座にお振り込みくださいますようお願い致します。

口座番号：00900-5-70364

加入者名：天理大学アメリカス学会

なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集しております。賛助会員の会費は年1口30,000円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお寄せください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター
(No. 52 : 2005年5月11日発行)

編集人：新井正一郎

〒632-8510 天理市杣之内町1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

<http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/>